

〔神奈川県教育委員会研究委託〕

おしやれによる障壁



神 奈 川 県 医 師 会

「障害の種類」

おしゃれによる障害（“おしゃれ障害” と略すこともあります¹⁾）の原因となる代表的なものをあげてみます。

1. ピアス
2. ヘアカラーリング（染毛、脱色）
3. パーマネント（パーマ）
4. 化粧
5. 人工的な日焼け
6. 足に合っていない靴
7. 刺青（いれずみ、タトゥー）
8. 美容整形

他にもまだまだあると思いますが、本リーフレットでは主に

1. ピアス 2. ヘアカラーリング（染毛、脱色）

について詳しく取り上げ、3～8についてはごく簡単に記します。



「おしゃれ障害発症のメカニズム」

少し皮膚科の専門的な話でわかりにくいかもしれませんが、皮膚の障害で多く見られる、かぶれ（金属アレルギーなどを含む）について触れることにします。

かぶれは医学用語で「接触皮膚炎」といいます。皮膚に炎症を起こし、赤くなったりひどいときはただれたりします。多くはかゆみを伴い、その原因は大きく分けて刺激性（一次的刺激）のものとアレルギー反応によるものに分けられます。

＜刺激性によるかぶれ＞

これは例えば強い酸やアルカリなどのように、刺激のあるものに触れて起こるものです。刺激が強ければ誰でもかぶれ、初回からでも起こることがあります。また、弱い刺激でも繰り返し触れるとかぶれることがあります。

＜アレルギー反応によるかぶれ＞

人体に有害な物質が侵入した場合、免疫を担当する細胞が働きかけその物質を排除しようとしします。こうして、人体は有害な細菌や他の自分に有害なものから身を守っていますが、その排除しようとする反応が過敏になりすぎる場合があります。そして過敏に反応しすぎると、むしろ人体に悪影響を及ぼしてしまいます。このような反応を「アレルギー反応」といいます。そしてアレルギー反応を起こす状態になったことを「感作(かんさ)」が成立したといえます。

多くの場合、何回か原因物質と接触してこの感作という状態が成立してからかぶれますが、初回から症状が出た場合は前述の刺激性か、あるいは知らない間にその物質やその物質に似たものにすでに何回か触れていてアレルギー反応を起こす（感作が成立した）状態になっていたと考えられます。また、原因物質には、アレルギー反応を起こし易い物質や起こしにくい物質など差はありますが、様々な物質が原因となり得ます。したがって、いろいろなものに触れる機会が増加すればするほどアレルギー

ギー反応を起こす（感作が成立する）可能性が高くなります。さらに、アレルギー反応が出現する速度や重症度は、一般的に数を重ねるごとに早く強くなり、乳幼児の食物アレルギーなどの一部を除き、一度感作されると一生継続いてしまうことが多いのです。また、一部の皮膚がアレルギー反応を起こすようになると他の部分でもアレルギー反応を起こすようになります。例えば、耳のピアスで金属アレルギーになれば、同じ金属でできているベルトのバックルがお腹に触れても原則的に金属アレルギーを起こします。

従来、子どもは大人に比べ、かぶれる原因（アレルゲン）との接触機会が少ないので、アレルギー反応による接触皮膚炎（かぶれ）は少ないと考えられていました。しかし、子どもの皮膚自体はバリア機能が未熟なため刺激を受けやすく、皮膚内への化学物質の侵入も容易です。したがって、接触皮膚炎（かぶれ）をむしろ起こし易い皮膚といえます²⁾。



1. ピアスによる障害

ピアスを身につける際には、皮膚に穴を開けますが、そのとき有害な細菌の感染によって、化膿を引き起こすことがあります。なお、穴はなかなかできませんので完成するまでその危険性は継続します。また、穴を開ける針を他人と共有した場合、エイズや肝炎などに感染する危険性があります。

次に金属アレルギーです。ピアスでは金属と長時間触れることになり、特に穴ができる途中は皮膚に傷があるため、感作されアレルギー反応を起こし易くなっています。例えば、アレルギー反応を起こしにくいとされている純金などでも、傷があることにより皮膚がアレルギー反応を起こし易くなってしまいます。ピアス経験者は金属アレルギーが約二倍多いとの報告もあります³⁾。海外で子どものニッケルの金属アレルギーテストの陽性率が日本より高いのは、ピアスやアクセサリーを装着するのが日常習慣になっているためと考えられています²⁾。また、一度感作され金属アレルギーになってしまうと治りにくく、一生続いてしまうことが多いのです。そして、人体の一部で感作が成立すると、原則的には他のどの部位でもアレルギー反応を起こします。ですから金属アレルギーになってからピアスを止めればよいというわけではありません。身の回りに金属を含むものは多く、大人になってからも金属アレルギーに悩まされる可能性が高くなりますので、子どものころから注意することが重要です。



第三の問題はピアスをしてしばらくしてできる“しこり”です。しこりになる病気の一つにケロイドがあります。このケロイドは傷跡が異常に盛り上がる病気で耳はできやすい場所です。耳のケロイドの原因の多くにピアスによる感染症や金属アレルギーがあげられます。ケロイドの治療は通常なかなかうまくいかないため、手術治療や様々な治療を組み合わせなければなりません。大変な時間と労力が必要です。

2. ヘアカラーリングによる障害

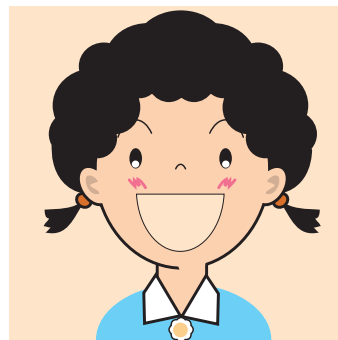
ヘアカラーリング剤には医薬部外品扱いの永久染毛剤、脱色剤・脱染剤、化粧品扱いの半永久染毛料、一時染毛料などがあります。ヘアカラーリング剤のどの成分もかぶれる原因になり得ます。特に問題になるのはヘアカラー、白髪染め、おしゃれ染めといわれる永久染毛剤のなかに含まれる酸化染毛剤の主成分であるパラフェニレンジアミンとその類似物質です。しかし、酸化染毛剤は明るい色から黒色まで幅広く染めることができ、色落ちしにくいいため、ごく一般的に使用されています。ここでは酸化染毛剤の主成分であるパラフェニレンジアミンとその類似物質による障害について述べます。

まず、障害の中で一番多いのは皮膚の局所的なもので、かぶれ（接触皮膚炎）です。パラフェニレンジアミンは比較的にかぶれ易く、症状は軽症から重症なものまで様々です。また、何回か使用してかぶれなければこの先もずっとかぶれないと誤解している人がいますが、パラフェニレンジアミンの場合、個人差がかなりあり、使用回数が100回を超えてからかぶれることも結構あります⁴⁾。ですから子どものころからヘアカラーリングをすると、現在症状がなくても大人になって発症する危険性が増すわけです。全身的な影響については、かぶれが生じる染毛剤等を使っていると、一般的にはアレルギー反応が段々と早く強くなります。触れたところ以外にも発疹が出てしまうことがあります（接触じんま疹、systemic contact dermatitis といいます）。また、ごく稀ですが極端にひどい場合ではアナフィラキシーショック（これは呼吸困難や血圧の低下、意識障害などを伴い生命の危険性がある）を起こした例も報告されています⁵⁾。ですから少しでもかぶれが生じた場合は使用を中止しないと大変危険です。なお、その他の造血器障害などの全身的影響については、現在のところ関係なく安全という報告が主流ですが^{6) 7)}、関係がある可能性を指摘する報告もあります^{8) 9)}。そして、ヘアカラーリング剤の多くは元来子どもに使用するという前提ではないため、子どもの使用に注意が必要です。



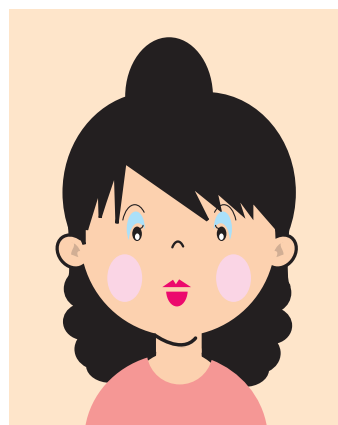
3. パーマによる障害

アレルギー反応によるかぶれはヘアカラーリングに比べると少ないと考えられています。しかし、地肌や髪の毛を傷めます。



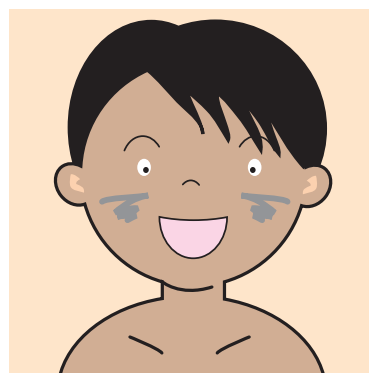
4. 化粧による障害

人体に触れる物質が、化粧品であろうがなかろうが、接触する機会が増えればかぶれやその他の皮膚障害を起こす危険性は増します。製品が子ども用とうたっていても、現在は特に子ども用としての規制はなく、大人用とほぼ同じ成分です¹⁾。したがって、特別に低刺激性であるとか、子どもにも安心ということではありません。むしろ値段設定が安い分品質が悪い可能性すらあり得ます。また、前述のとおり子どもの皮膚はバリア機能が未熟ですので²⁾ 大人よりいろいろな影響を受けやすいといえます。



5. 人工的な日焼けによる障害

しみ、そばかすや皮膚がんの発生率の増加があげられます。なお、日常生活でもできるかぎり日焼けをしないように指導することが望まれます。



6. 足に合っていない靴による障害

陥入爪（巻きつめ）や外反母趾などの原因の一つになります。なってしまうと後々苦労しますので、子どものころからの予防が大切です。靴を選ぶ場合はサイズの合わないもの、紐のないもの、先が細くてかかとの高い不安定で脱げ易いもの、靴底のクッション性が悪いもの、蒸れやすいものは避けたほうが良いでしょう。学校指定の靴や上履きなども考慮が必要と思われます。



7. 刺青(いれずみ、タトゥー)による障害

皮膚に針を刺すわけですからエイズや肝炎など血液を介する感染症にかかる可能性があります。現在でも一度刺青を入れてしまうと、レーザーなどを駆使してもきれいに消すことはかなり難しいです。



8. 美容整形による障害

骨格やその他の臓器が成長し、形が変化する子どもに対する美容整形は、成長すると歪みが生じたり変形したりする可能性が高いため実施すべきではないと考えます。



「まとめ」

ピアス、ヘアカラーリング、パーマメント、化粧などの普及と低年齢化が進んでおり、それに伴い皮膚障害などの健康被害も増加し低年齢化する傾向にあると思われます。

このような状況の中でアレルギー反応（金属アレルギーを含む）やケロイドはなかなか治りにくいこと、刺青は今でもきれいに消すのは難しいこと、そして、ピアスや刺青などは他人と針を共有した場合にエイズや肝炎などの感染の危険性があることなどを、子どもたちに教え認識させることが必要です。ここで保護者の役割も重要となりますが、保護者のなかには黙認するだけでなく、むしろ積極的にピアス、ヘアカラーリング、パーマメント、化粧などを子どもに勧める場合があるようです。保護者にも危険性についてしっかり認識してもらうことが大切です。しかし、実際にはすべての保護者に危険性を理解してもらうことはなかなか難しい状況にあり、今後の検討課題だと思います。

「診療窓口及び診療内容について」

神奈川県医師会

<http://www.kanagawa.med.or.jp/>

神奈川県皮膚科医会

<http://kanahifu.u.min.jp/>

相談は皮膚科専門医などへ。

参考文献

- 1) 岡村理栄子：おしゃれ障害、少年写真新聞社、2005.
- 2) 鶴田京子ほか：子どもの接触皮膚炎、MB Derma、93:25-33、2004.
- 3) 高橋知之ほか：ピアスアレルギー、アレルギーの領域、4：43-47,1997.
- 4) 東馬彦ほか：消費者におけるヘアダイ皮膚炎、皮膚 35:227-234,1993.
- 5) 谷口龍生ほか：染毛剤に含まれる para-toluenediamine が原因であったアナフィラキシーの1例、日皮アレルギー、8:7-11、2000.
- 6) Nohnek, GJ,et al：Toxicity and human health risk of hair dyes. Food and Chemical Toxicology, 42: 517-543、2004.
- 7) 杉浦秀次ほか：理容師子コホートにおける造血器疾患、愛知医科大学医学会雑誌、28：283-286、2000.
- 8) Rauscher, GH,et al：Hair Dye Use and Risk of Adult Acute Leukemia. Am J Epidemiol, 160:19-25、2004.
- 9) Huncharek, M,et al：Personal Use of Hair Dyes and the Risk of Bladder Cancer: Results of a Meta-Analysis. Public Health Reports, 120:31-38、2005.

平成19年3月発行

おしゃれによる障害

執筆協力者 大 倉 光 裕

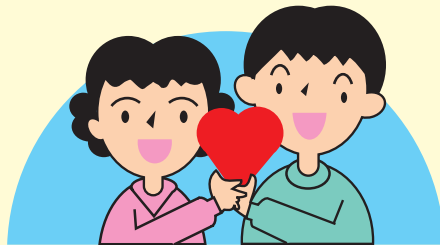
武 沼 永 治

編 集 神奈川県医師会

学校医部会

発 行 神奈川県教育委員会

印 刷 シュープリント



平成19年3月発行
おしゃれによる障害
神奈川県医師会
横浜市中区富士見町3-1
電話 045-241-7000
FAX 045-241-1464